



写真左は、50周年記念館が満員となった看護学科の全体説明。同右は、医学検査学科の模擬実習で、白衣を着て顕微鏡をのぞく高校生たち



## 令和6年度第2回オープンキャンパス盛況

# 猛暑の中、過去最多1461人来学

令和6年度の第2回オープンキャンパスが18日（日）行われ、過去最多となる1461人の高校生や保護者などが本学キャンパスを訪れました。これまでの最多は令和元年8月の1069人で、今回は大幅に人数を伸ばしました。

大雨のため出足が伸び悩んだ7月の第1回（参加676人）から一転、好天に恵まれたこの日は、開始予定の午前10時になっても受付の行列が途切れず、皮切りとなる学科ごとの全体説明の会場を増やし、時間も10分遅らせての開始となりました。

7月のオープンキャンパスに続き、キャンパス各所に設けられた各学科・専攻の模擬実習コーナーはどこも大盛況。中には、順番待ちでござったがえすコーナーも見られました。また、ピア・サポーターによる恒例の「先輩と話してみよう」

コーナーも2カ所に開設され、訪れた生徒や保護者が「勉強は忙しいですか」「アルバイトはできますか」「（入試の）面接ではどんなことが聞かれますか」など、活発に質問していました。

中学時代から理学療法士の仕事に興味があるという八代清流高校2年の男子生徒は、昨年から他大学・専門学校のオープンキャンパスを回っているそうで、初めて訪れた本学について「先輩たちがフレンドリーで、とても明るい雰囲気」。看護師を目指している東稜高校3年の女子生徒は「キャンパスが広くて設備も充実していますね」と気に入った様子で話していました。

（NL編集部）



学内ツアーで、図書館の概要などの説明に耳を傾ける参加者たち



ピア・サポーターの学生に学生生活の様子などを熱心に質問する高校生

## 運動器疾患の新たな治療法開発めざす

日本人の平均寿命が伸び、健康寿命の延伸が望まれる中、加齢に伴い筋量や筋力の減少がおこるサルコペニアを含めた運動器疾患の問題は重要な課題の一つです。加齢により速筋と遅筋の構成比が変化することが知られており、運動能力の向上にもこの構成比の変化は重要と考えられています。

マウス実験では、成体の筋細胞への遺伝子導入により遅筋繊維から速筋繊維へのリプログラミング（分化転換）の誘導が可能ですが、特に私たちが注目している転写因子Six1とSix4(Six1/4)は速筋繊維への分化を誘導する遺伝子プログラムの活性化に必須で、この活性化は筋細胞の速筋への分化を誘導する遺伝子プログラムを開始させる司令塔として機能すると考えられています。

私たちは、Six1/4の発現を亢進させて速筋への分化を誘導する分子機構およびSix1/4の発現を抑制して遅筋への分化を誘導する分子機構を明らかにして、運動療法や薬剤投与により後天的に筋繊維タイプの変換を誘導できる新しい治療方法の開発をめざしていこうと考えています。今後ともよろしくごお願い申し上げます。

基盤研究 (C)  
2024-26年

リハビリテーション学科  
田中聡研究室

山口泰華 研究員

10年ぶりに訪れた懐かしの教室で記念撮影する言語聴覚学専攻の1期生たち

### 理学療法学専攻4年次生

## 学部のトップ切り 卒業研究発表会

学部のトップを切ってリハビリテーション学科理学療法学専攻の卒業研究発表会が5日(月)、50周年記念館であり、4年次生38人が14グループに分かれ研究の成果を発表しました。

グループごとに10分の持ち時間(うち質疑応答3分)で行われました。発表内容は、体幹動揺量や半側空間無視、階段昇段、足趾把持力など多岐にわたりました。3年次生も見守る中、登壇した学生たちは熱心に研究の成果を披露。質疑応答も活発で、発表した学生たちは堂々と質問に答えていました。

卒業研究発表会は、9月に医学検査学科、10月に生活機能療法学専攻、11月に言語聴覚学専攻が予定されています。(入試・広報課)

笑顔晴れやか10年ぶりの再会

リハビリテーション学科言語聴覚学専攻の1期生が11日(日)、10年ぶりに本学に集まりました。参加者は14人、遠くは広島から駆けつけてくれた卒業生もいました。また、ほとんどが結婚しているということもあり、子連れ参加での賑やかな同窓会となりました。

### 言語聴覚学専攻1期生

久しぶりの母校に足を踏み入れ、会場となった思い出深い教室に入った卒業生たちは感慨深げ。あちこちで旧交を温め合う姿が見られました。その後の会食では、現在の仕事のことや子育てのこと、学生時代の思い出などの話題で大いに盛り上がりました。積もる話もたくさんありすぎて、あっという間に4時間が経過し、閉会時間となりました。

参加者の一人で熊本市内在住の伊賀(旧姓松本)雅さんは、「久しぶりにこの教室で皆と会えて本当に楽しかった。また10年後もここで皆と会いたいです」と笑顔で話していました。20年後は皆、どうなっているのでしょうか? 我々も楽しみにしたいと思います。

(言語聴覚学専攻 大塚裕一)



14グループが発表を行った理学療法学専攻の卒業研究発表会

# 「生まれる命も 亡くなる命も 大切さは一緒」

## グリーンサポート「みんなの和」活動への理解と協力要請

流産や死産、新生児死などを経験した人たちに寄り添う活動を行っている熊本グリーンサポートグループ「みんなの和」の澤野典子代表らが1日（木）、本学を訪れ、看護学科の岡順子教授らに活動への理解と協力を求めました。

同会は、赤ちゃんを亡くし深い悲しみの中にいる家族を支え、心の支援の必要性を啓発するピンク&ブルーリボン運動に賛同した澤野代表が中心となり2021年に発足。行政や医療機関とも連携しながら、同じ経験をした人や家族が集うワークショップやお話し会など多彩な活動を繰り広げています。22年からはピンク&ブルーリボン運動PRのため、10月の啓発週間に合わせ熊本市中央区のサクラマチで夜間のライトアップチャリティーを開催。今年も10月9～15日の1週間、同施設をピンクとブルーの明かりでライトアップします。

本学には、澤野代表と丸山真紀さんが来訪。応対した看護学科の岡順子教授、川口弥恵子准教授に会の趣旨や活動を説明した後、学生への啓もうや活動への協力を要請しました。

岡教授は今年中に学生との交流の場を設けたいとした上で、「学生たちには、自分たちにも起こり得る自分事としてとらえてもらい、生まれる命も亡くなる命も大切さは一緒だということを理解してほし

い」と話していました。

この日は、澤野代表らの活動を密着取材しているKKT熊本県民テレビの取材班も同行。その模様は19日（月）に夕方のニュース番組で紹介されたほか、24日（土）には「現場発“そら”はいつもいっしょ 亡き赤ちゃんと生きる」と題した特別番組が放映されました。（NL編集部）



活動への支援策を協議する、左から「みんなの和」の丸山さん、澤野代表、岡教授、川口准教授

### 私の秘話★ ヒストリー

### 人として成長する 機会となった出会い

私は人として成長する機会の中で特に印象深い出会いがあります。それは長期間勤務していた部署を異動した時のことです。慣れない疾患のケアや環境での勤務は不安と緊張の連続でしたが、フリーとして様々な部署を担当され、週に1回前部署の清掃に入られていた方からの声かけでした。それまで挨拶以外会話したこともありませんでしたが異動先で「あらここに異動したの、いつも生き生きと仕事されてましたね。また顔を見られて楽しみです」と何気ない会話でした。

自信をなくしていた時期であり、自分を認めて頂いた気持ちと安心感となり1週間に1回の時間を楽しみにするようになりました。今でいう心理的安全性が確保できたひと時であったと思います。この経験は自分は様々な人に支えられて今があることを実感し、自己を振り返る機会となりました。

現在も当時の気持ちを忘れず、朝から教室を丁寧に清掃される業者の方々に、積極的に挨拶をすることが日課となっています。人としての成長を促すものは、関わる全ての人であることを忘れずこれからも成長し続けたいと思っております。

助産別科

浅尾由美准教授



### 猛暑の中で涼演出

連日の猛暑にもかかわらず、過去最多となる1400人超が訪れた第2回オープンキャンパス。3号館3、4階の看護学科会場では、各ブース入り口に氷柱がお目見えしました。氷柱を入れた盥（たらい）には、同学科教員の発案で朝顔の造花やスイカを模したビーチボールを配して涼を演出。通りかかった高校生たちが、手で触れては、ほっと一息ついていました。（NL編集部）

今週の1枚